

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

岩井文男著

『海老名弾正』

(日本基督教団出版局、B6判
三〇二頁、九五〇円)

明治期の同志社学生風俗の中には、一見粗野で荒削りな蛮から氣質があったと思ふ。そんな氣風は他のハイカラなキリスト教系私学に較べて、同志社には今でもそこはかとなく残っているようで楽しい。これはもちろん、同志社の創草期に大挙来校した熊本洋学校系の学生たちの持ちこんだものだろう。

海老名弾正は彼らの中で最も傑出した一

人であり、さらに日本キリスト教界の巨峰の一つとなった。長身美髯の偉丈夫で、その古武士の風格と氣骨とが、多くの人々のインスピレーションを引き出したとさえ思えてくる。「広辞苑」も彼に一項を与えているくらい、広汎な思想的感化を各界に及ぼしているが、彼についての客観的な伝記はこれまでになかったと言つてもよい。

岩井文男氏が新島学園長としての激務の傍ら、自らの追憶の念をこめて書かれたこの伝記には、海老名弾正の入信体験から、その思想言語、思想の構造を刻明に分析しさらに明治―大正とめまぐるしく展開する日本近代の歩みの中で、彼の「人と思想」の辿った軌跡が描かれてある。キリスト教史のみならず、日本近代思想の研究にとつて貴重な労作であると思える。

海老名は同時代の指導者内村鑑三や植村正久らが、キリスト教の正統主義に根ざす「定着定型」のタイプであったのに対し、時代の流れをまともに受け、主体発展的に之に対処した「包括応化」型であることに岩井氏は注目されている。そのため、自由派の驍將たる海老名弾正が、時として正統主

義派から矛盾変節と指弾されたその思想もむしる彼の立場からすれば一貫した必然であり、「体験派」の負わされた姿であったことが解明されてゆく。

日本のキリスト教指導者として、彼ほど悲惨な体験を持ったものはない、という第一章の「視角」から、自然科学の学習を媒介としての造物主の所在の覚醒、祈禱「職分」の自覚、「父子有親」による神の体得、そこから湧き出した人格の本義、この人格の覚醒に即応するものとしての社会や歴史の進展への目、と辿られて見れば、自ら彼が例えば大正デモクラシーの指導者吉野作造などに与えた感化が納得されてくる。そういう叙述において本書は特色をもっている。

さらに本書の各所にちりばめられている彼の生まの人間像も私たちの心を惹くに足る。一週に八〇キロを闊歩走破しての安中伝道、寒中火氣抜き、茶断ちのストイックな生活、その彼が意外にも入日を愛した悲しみの人であったことなど、私はこの書によって知ることができた。

「人と思想シリーズ」は、このところ新島

襄、山室軍平、そして今度の海老名弾正とつづけて同志社人をとりあげているが、日本近代思想史上の同志社が、今日に許える意味が問われているのではないだろうか。

(高道 基・大学神学部嘱託講師)

村山 盛 忠 著

『コプト社会に暮らす』

(岩波書店、新書判)
二二二頁、一八〇円

著者村山盛忠氏は、同志社大学神学部を卒業し、大学院で修士課程を了え牧会に励んだのち、エジプトに宣教師として四年間働かれた。一九六四年十月から六八年の九月まで満四年間であった。在学時代、労働者伝道の実習にあたった経験もあり、日本から都市産業伝道にあたる人材を派遣して欲しいというエジプトの教会の招きにこたえて日本基督教団から送られてエジプトに渡った。

日本の教会は、海外に自力で宣教師を送るほど成長していない。しかし、エジプトの教会は、進展しつつある都市産業化にあ

たって、西欧からではなく、アジアから宣教師を迎えたいという希望もあらわした。仲介の労をとったのが、当時日本にいたヘンリー・ジョンズ宣教師であった。村山さん一家は、このエジプトの教会の招きにこたえる決心をした。

それは、一見無謀とも思える決断であった。普通西欧の宣教師は、二年から三年にわたって準備のためにアラブ語の研修やエジプトの歴史や文化の勉強をする。村山さんたちは、そんな余裕は全然なかった。エジプトまでの旅行が彼らの唯一のオリエンテーションであった。西欧の教会は、何といても過去一五〇年宣教師を送って支えてきた歴史をもっている。つきつぎと本国からニュースや出版物がおくられてくるし、間安の人々はくるし、財的な支援態勢もはっきりしている。しかし、日本基督教団の海外伝道委員会が村山牧師一家をエジプトに送ったといっても、それは名目上のことで、教団自体からは、財的にも、人的にもさしたる支援はなされなかった。財的には米国の長老教会が支援をし、関西労働者伝道の仲間が自発的に、小包を送ったり、週

刊紙を送ったりする程度のことしかなされなかった。

そのような、困難な条件にもかかわらず村山さん一家は、働きながらアラビア語を学び、エジプト人の牧師や労働者と一緒に生活を共にしながら、仕事をしてゆかれた。それは、従来からの宣教師のイメージとは全く違ったゆき方であった。それだけにこの手記は、成功や成果の叙述ではなく、むしろ、失敗や失意の記録であるかも知れない。しかし、その中に、ユーモアと希望がある。著者は弱い人間としてなお隣人との連帯を失うことなく淡々と生きていく。その姿は読むものに感動を与える。

エジプトでは、外から来た「旦那」を「ハワীগ」とよぶ。日本語でいえば、「外人さん」である。村山さんは、「ハワীগ」と呼ばれるたびに、自分は、日本人としてのハワীগであることを痛感する。それは、同じハワীগでもセカンド・クラスのハワীগである。「ハワীগ」である日本人キリスト者とし、大多数が回教徒であるエジプト人の中で生きることは、何を意味するのか。そのことを問いかけているのが「日本

人であること、宣教師であること」というタイトルのついでに第四章である。これは、この本のクライマックスでもある。

そこに、次男がエジプトの大地で生まれたことに共生のきずなを見出し、意識的な言葉より、ごく自然な生活の営みの方が連帯につながることを学ぶ。さらに、夫人の父の死にあたって、自分自身が、身うちのものを選んでおいて、その死にあたって、キリスト者である責任を感じさせられる。帰りはヨーロッパを廻つてとたのしみに積み立てていた旅費をほたいて夫人は單身帰国する。未信者であった義父がはるばる帰って来た宣教師の妻である娘のことばに平安を見出して、病床で受洗をする。

「長い葛藤の末、女房は自分の父の床にとばをたずさえて急遽帰国することになった。彼女はことばの使者以外の何物でもなかった。そして義父はそのことばを待っていたかのように深く頭をうなずかせて受け入れた。義父が天に召されたのはその翌日であった。追悼告別式が八日市教会で執行されたのを知ったのは、それから数日後に届いた女房からの手紙によってであった。

その時の私は、ひとりの弱い人間にしかすぎなかった」

これが本書の終わりであるが、またはじりでもある。

数多の良書の多い岩波新書に、同志社大学を出た宣教師の魂の記録が含まれたことを感謝をもって祝いたいと思う。

（竹中正夫・大学神学部教授）

古米 淑 郎 編

『第二次大戦後の

アメリカ経済』

（ミネルヴァ書房、A5判
二、二〇〇〇円）

戦後米國經濟の光と影。本書はそれを第二次大戦後からケネディ、ジョンソン時代まで続いた史上空前の經濟繁榮を支えてきた「総需要管理政策を基本とする政策運営」が、ニクソン時代に入って頂点に達したドル危機とインフレで破たんするまでの道すじをたどることによって鮮やかに描き出している。

これまでの米國經濟論には、戦争と經濟、

ドルと国内經濟、豊かさの中での貧困——というアプローチをしたものが圧倒的に多い。その意味で本書の接近方法には特異さがある。著者は、米國の經濟運営の原点は三〇年代の大不況の教訓に求められ、歴代政権は不況の回避と高い雇用水準の維持を最優先の政策課題としてきた、ととらえている。これは、米國の場合は物価安定、國際收支改善、經濟成長促進といった西歐諸國で最も深刻な問題とされていた政策目標にあまりとらわれないですんだという、幸運な、經濟環境にあったからだ。トルーマン時代に法的、制度的下地ができた米國の総需要管理政策はその後、理論的にも、体系的にも発展し、ケネディ、ジョンソン時代に頂点に達した。この時期、いわゆる二ユー・エコノミックスで理論武装した総需要管理は、著者によれば「たんに景氣循環の抑制にとどまらず、赤字財政下の減税政策による総需要刺激によって需給ギャップの解消を図り、一九六五年中に高雇用実現という所期の目標を達成したことになる。

しかし、ベトナム戦争の拡大した六六—六七ごろから、米國も他（五十一頁へ）